

Gikyohan Times

No.0017

GIKYOHAN TIMES

2022 年 2 月発行

スクールイーライブラリー読書感想文コンクール

当社は岐阜県の全小中高校に教科書を供給し続けて 100 年以上の会社です。当社は岐阜県の全小中学校に「スクールイーライブラリー」進呈させて頂きました。電子図書によって新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。スクールイーライブラリーの読書感想文コンクールのご参加誠にありがとうございました。詳細情報は当社 HP (<http://www.gifukenkyohan.co.jp>) のバナーでご確認もできます。岐阜県教販通信のバックナンバーも HP に記載しておりますのでご覧いただくと幸いです。

もう 2 年間にもわたって続いているコロナ禍は、昨年 2 月の急に決まった全国学校一斉休校をはじめ、学校現場に多くの災厄をもたらしてきた。今さら私が言うまでもなく、その悪影響は現場の先生方が一番切実にわかっていることだろう。

休校による授業の支障だけでなく、部活、学校行事、式典… 数え切れないほどの影響が出ているわけだが、改めてそれについて繰り返す言を並べるのは本意ではない。ここでは、数少ないプラスの面について考えてみたい。

一斉休校を機に、オンライン授業の必要性が急激に増大したため、国は、児童・生徒 1 人 1 台のコンピュータ端末を整備する「GIGA スクール構想」を大幅に前倒して実施することとなった。2019 年度から 23 年度までの 5 カ年計画で行うはずだったものを、2020 年度のうちに完成させるようにしたのである。スタートが 2019 年 12 月だったから、4 年 3 ヶ月で計画していたものを 1 年 3 ヶ月で達成したことになり、実に 3.4 倍のスピードで完了させたことになる。

この結果、2021 年度当初には、ほぼ全ての小中学校に 1 人 1 台のタブレットが常備された。皆さんの学校でも、新学年の当初から、子どもたち一人一人に行き渡っていたことだろう。ただ、その後一斉休校が行われなかったこともあり、オンライン授業については、感染が広がり学級閉鎖や臨時休校となった一部の学校以外だと、さほど実施される状況にはなかった。

そのため、せっかく完備されたコンピュータ端末も、活用されないままになっている例も少なくない。使われずに埃をかぶっている学校さえあると聞くと、もったいないと

思ってしまう。

もちろん、岐阜県内では School e-Library を使って子どもたちの読書体験や、読書指導に使っているケースが広がっているのは承知している。昨年実施した読書感想文コンクールなどでも、その成果は着実に表れている。だが、もう一歩進んで、授業で使う方策についても、もっと検討されていると思う。

各学校が 22 年度の教育指導計画を考えるに当たり、試験的にでも、タブレットの使用方法を模索してはどうだろうか。わたしは、過日、首都圏で、そうした取り組みに挑んでいる中学校の公開授業を見せてもらう機会を得た。ここでは、一人一人の教師が、それぞれ独自の発想で、自分の授業に積極的にタブレットを活用する工夫をしている。

授業の土台となる教科書は、従来通りの使い方だ。その上で、教科書に沿って学ぶことにプラスする部分について、タブレットを活用するのである。

国語の授業では、松尾芭蕉の俳句を学習していた。教科書に載っている「奥の細道」にある芭蕉の句を読み、その意味を理解するところまでは、これまでのやり方と変わらない。で、そこから次の「探究」へ進むときに、タブレットが威力を発揮するのだ。教師が与えた課題は、グループごとに最も印象に残った 1 句を選び、それを、芭蕉の旅の中でその句が生まれたバックグラウンドも含め、画像を使った短いプレゼンテーションにして発表するというものだった。

これを、生徒たちはどのようなプロセスで仕上げていくのだろうか。

【次回へ続く】



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952 年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でなし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身